
死にたいきみへ

宗像 佳世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたいきみへ

【Nコード】

N9368Z

【作者名】

宗像 佳世

【あらすじ】

廃ビル自殺をきっかけに生死を問い始める私。精神の崩壊と引き換えに見つけた答えとは。

青空文庫小説投稿サイトでも同作品の連載を行っております

- 2 (前書き)

不定期更新です

最近見たニュースで覚えているものは確か自分の近隣で自殺があったということだった。全国版のニュースでやっていたものだったからてっきりそれが他人の日常のように思え、想定された事実だと片づけてしまった。我が家の情報屋が昨晚のプチ主婦会で、その現場は例のビルだとコロッケをつまみながら言っていた。その後の自分は自殺に対して「かわいそうね」という流行に乗った母の言葉に共感はできなかったが例のビルが現場だったということがどうにも気がかりで仕方なかった。

例のビルとは町のと真ん中にある廃ビルのことだった。バブル期に企業が建てたりゾート用の施設だと耳にしていたが、結局のところ人が東京に流れてゆくばかりのこの街には適することができずに捨てられたビルのことだ。都市化計画と称されながらもここにはいまだに一軒家や長屋が多く、むしろ捨てられたビルだけが俗世ならに倣っているような、ある意味死に死にした街の象徴だった。ジャージやスパーで買った服が認められた住人が黄ばんで捨てられたビルを時代遅れだと繰り返し返すことは子供の自慢大会にどこか似ているような気がしてならなかった。けれどもそれが住人同士の挨拶であり、自分はいさつの仕方を知らない不屈きものでしかなかった。

夕食を終えた私は食卓で出た”自殺”という言葉が耳に残っており、ビングから自室へと逃げた。自分を無条件に肯定してくれる空間を、その不似合いな言葉が穢してしまった気がしてならなかったからである。急ぐようにドアを閉めたとき、これでようやく、と穏やかな気持ちになれた。部屋はあたたかいたかいたと言えなかったが、私は即席のハリネズミの毛皮を脱いだ。あの汚染区域から逃げ出したいという激しい欲望は決して自分が高潔だからという傲慢な理由から来たものではなかった。自分は屋根の下でさえも他人の顔色を変えな

いように行動することを自然と心がけていたし、一定の評価を得る術を体現するほどの常識人であった。だが、私はそれでも自分に残ったわずかな純潔を守るために子供じみた真似をしてしまったのである。

どうせやってしまったことだから、とついに私は自分の悪行を正当化し、吐息の白煙に耐え切れずに電気ストーブの前にそれが自分のものだといわんばかりに座った。暖を取るために居座ることがなんだか手持無沙汰な気もしてしまどきの小説を読むことにした。そりゃ君、子供というものだよ。大人なんか嫌いだ、やいクソババア。きつと私は老いても小説やドラマから学んだこういう言葉に縛られるに違いないと思った。いや、縛るのは私をコドモや老人と名付けた人ではない、自身なのかもしれない。私は大人なのだ。けれども私が大人であるから母はババアというわけではない。それと同じようにもしかしたら例の廃ビルも、元の名前があつたのかもしれない。とここで私は考えるのをやめにする。なあんだ、まだ自分は廃ビルに気が合つたのかと気づいたからである。そしてその先には”自殺”という具合ですんなりと話が進む。これじゃまるで誰かさんと同じだと思いきむけがし、ついには知らないふりをした。しばらくするとその誰かさんが一階のほうから風呂が沸いたと言った。母は、やはり二十四を超えた私を昔の愛称で呼んだ。

風呂の水が乳白色に濁っていると、昔見たホラー映画のことを思い出されて足でも掴まれやしなやかと身勝手な不安がよぎる。そのあと黒髪の女が目を剥き出しながら私を恐怖と無音の世界へと連れ去るのだ。私がいたという痕跡は乳白色の上に広がる紅い波紋だけが証明するのである。いい年をして何を考えているのだろうと身震うことで考えを捨てた。世の中の女が母のように単発だったのならいつまでも長湯が出来ただろうに。しかしながら二十四年の統計をみるとどうも自分は髪の毛の長い女に惹かれやすいのかもしれない。黒髪がカーテンのように黒黒しくすべてを遮り、しなやかな白い四肢がそこから見え隠れする、あのオソロシイ心地よさを望んでいるの

だろう。疎ましい欲望も乳白色の水面下に沈ませることにした。

奇妙な空間に私は立っていた。視界は白いもやがかかっているおまけに薄暗い。慣れない視界に慣れるとコンクリートが私を囲んでいることに気付いた。どれもひび割れたり鉄筋がむき出しになっていたりしていたが、それが崩壊の契機になるわけではないようだった。埃っぽいビニルが空間を迷路のように見せかけ、私の侵入を阻んでいた。有害なものを体に取り入れまいと口を片手袖で覆いながら進む。やはり“正装”出なければ私の要求を満たすことはできないようで、すぐにカビの混じった生暖かい空気が気道を満たし始めた。臭いに胸を突かれそうになったとき、これはまどろみの中での出来事にすぎないことを理解した。瞬時に苦痛から解放され、心なしか呼吸と歩みが軽やかになった。ビニルの森を抜けるとそこには吹き抜けがあつた集合住宅の中庭のようにきれいに手入れされた木々と滑り台やバネの遊具が置いてあつた。あんなものでは子供が楽しめるはずもない、全くわかっていない大人たちだと少々不愉快な気分になった。ふと、しろいぶつたいが私の視界に入った。吹き抜けを挟んだ反対側にそれは居た。らせん階段の上で妖しく形を変えて大きくなってきた。私に駆け寄ってきているようだった。

白い物体の正体は女であつた。あまりに服の色が映えていたせいで黒い長髪も顔もあることに気付かなかつたのだ。女は私と数メートルの距離を保っていた。女の唇が紅い三日月へと屈伸したとき、耳元で女の声が出た。

気が付けば現実へと生き返っていた。奇妙な遊歩を体験している間も生きてはいたのではあるが、今あの未知の空間では感じられなかつたものを自分はここで再確認する。時計が規則正しく脈を打ち、向かいの道路で大型トラックの轟音が時折響く。先ほどまではなかつた積み重ねがここにはあつたのである。

月が出ていたのもう一度眠りについてみようと思つたが先ほどの白い女の台詞が私の頭で再生された。

えーぐりーん。

女はそういったに違いなかった。もしもそれが女の名前だとしたら、おそらく時代の波に乗れなかったか個性を尊重する風潮の最先端をいつているのだろう。私はあくまでも時代遅れの街の住人だということを感じ出し住人らしく前者を正解とすることにした。

その後は電子音のような耳鳴りが時折し、なかなか就寝することができなかったのだから、ぐりーんの女と夢をぼんやりと考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368z/>

死にたいきみへ

2011年12月29日11時53分発行